

普及情報

生産と加工が連携し更なる商品づくり

1 地域の概要

姫路市安富地区は、1991年から棚田の転作対策と農地の有効活用のため、ゆずが植えられ、「安富町ゆず組合（会員52名、面積約6ha）」が結成された。1997年ごろから、ゆずの、加工販売に取り組み、2005年に「農事組合法人安富ゆず組合」が発足した。2007年11月に加工施設「安富ゆず工房」が完成、2月には直売所を併設した。

2 ゆず生産量を増やすための活動

(1) 反収を高めるための栽培技術改善

ゆず面積6haの反収は190kgと非常に少なかったため①施肥量②せん定③防除等栽培技術上の問題を改善した。

表1 安富ゆず組合のゆず生産量

2005年	2006年	2007年	2008年
11.4t	27.3t	30.0t	45.0t

(2) 栽培面積を増やすための取組

組合で20haを増やす目標を立て、2007年は733本（1.2ha相当）、2008年は495本（0.8ha相当）を植栽し、2007～2008年には2000本の台木を育成、品質のバラツキ解消を目指している。



図1 苗木の台木づくりをする組合員

3 なぜ商品開発なのか

2006年度新山村振興等農林漁業特別対策事業で加工施設を建設し、大きな借入金が発生した。その返済には商品開発により販売額がアップすることが必要であると考えた。

4 事業の導入で新商品開発

農林水産省の「新商品・新技術開発プロジェクト事業」を活用し、商品開発の原動力とするために「新商品開発推進会議」を発足させ、短期間で集中的に商品開発を行った。

5 ゆずの加工技術の確立と商品化

(1) ゆず加工品の商品化技術の確立

消費拡大には新感覚の商品が求められているため、新商品開発推進会議でアドバイザーを交えた商品開発研究会を行った。地元企業との共同開発も視野に入れ、2007～2008年の短期間の取組で、ゆず石けん、ゆずシャーベットなどの技術開発した加工品、10種類の商品がデビューした。

(2) 普及センターの役割

ア 関係機関、新商品開発のスケジュールを調整した。

イ 新商品のアイデアの提供と、各分野のプロ（専門家）を紹介し技術確立を進めた。

ウ 地域への広報活動と情報の提供した。



図2 安富のゆず加工品

6 安富ゆず組合が発展するために

表2 安富ゆず組合の販売額の推移（単位：千円）

2004年	2005年	2006年	2007年	2008年
6,000	8,000	21,300	22,700	40,700

栽培と加工は車の両輪であり、組合員全員がこのことを念頭におくことが「農事組合法人安富ゆず組合」の発展に求められる。

竹中 寿枝子（姫路農業改良普及センター）
（問い合わせ先 電話：079-281-9325）

ひょうごの農林水産技術 No.162

平成21年3月1日（隔月刊）

兵庫県立農林水産技術総合センター（0790）47-2400